

# 神話のいきづくヤムナー河畔（その三）

東方学院専任研究員 及川弘美

ヤムナー河畔には、まだなお、数カ所にクリシュナ神話にまつわる聖地があります。しかし、それらについてはまたの機会にお話することとして、今回はヴリンダーヴァンの町中に目を向けてみましょう。

いちばん最初に述べましたように、ヴリンダーヴァンはクリシュナ信仰の聖地として、一年中インド各地からの巡礼者で賑わっています。この町の人口は約二万人ですが、町中を歩いているとその倍くらいは住人がいるようにみえます。はじめのうちには、こんな小さな町にずいぶん多くの人々が住んでいるんだなあ、などと感

心していたのですが、なれてきますと、この町の住人ではない人々が大勢いることが、わかるようになりました。たとえば、「バンダルデーコー、バンダルデーコー（猿に気を付けなさい）」と叫ぶガイドらしい人の後を付いて行く一団、こぼれそうなほど人間を乗せているインド独特のあの大きな自家用車、そしてこの町では決して見られないような柄のサリーを身にまとった女性たちなどがそうです。巡礼者たちは家族や個人で来る場合、またはバスで集団でやって来たり、あるいは高名な僧侶が大巡礼団を率いて遠方からやってくる場合など様々なようです。

わたしが滞在していた信徒会館では、南インドのバンガロールから千人もの大巡礼団がきてそのうち半分の五百人が、二晩を過ぎて次の巡礼地を目指して去っていくということがありました。

さて、このように巡礼者で賑わっているヴリランダヴァンの町ですが、通りを賑わせているのはなにも人間だけではありません。インドを旅行されたことがある方なら、車の走る通りに牛なども平然と歩いているといった光景を一度ならずも目にしていることと思います。ここヴリランダヴァンでは牛どころか犬、猿、豚まで市民権があるかのように至る所にいるのです。とにかくここに住んでいる人間と同じ数ほど動物がいるのではないかと思われるくらい多いのです。このようなことはインドで珍しい光景ではありませんが、その中で実際自分も生活してみると、なにか別世界にいるような不思議な気

がしてくるのです。日本ではこれほど動物を身近に見ることも、感じる事もなくそれが当たり前でした。ところが、ここでは相当数の動物たちが、ひとつの町の中で共に暮らしているので、それは、この町の主要成員である人、牛、犬、猿、豚たちが、それぞれ自分たちのテリトリーをもち、ある一定の秩序のうえに共存しているようでもありました。

ある時、私はこんな光景を目にしました。巡礼者たちの食事のバナナの皿と残飯が捨てられていた所に、その残飯を狙って、二匹の犬と豚が数匹が寄ってきたのですが、最初にあさりだしたのは子連れの母豚でした。途中で他の豚が近付こうとしたのですが物凄い勢いで蹴散らされてしまいました。犬たちはその様子を遠巻きに眺めていたのですが、残飯をあらかた食い尽くしてしまつて豚たちが行つてしまうと、今度は二匹の犬たちのうち獯猛な顔つきをした一匹

がもう一匹を追い払ってあさりだしたのです。残飯をあさるにしても順番があるのでしょいか。またこんなこともありました。私が、通りのラッシー（ヨーグルトジュース）屋さんでラ

ッシーを飲んでいると、二、三匹犬が近付いて来ました。私は元来、生きものが苦手で、こんな風に集団で近付いてこられたりしたら、恐くて飛び上がってしまうのですけど、この時は、



最初ドキツとしましたが、不思議とその後の恐怖はありませんでした。彼らは私からちよつと離れて、ちよこんと座り私の方を見てなにかを待っているようでした。それがなんであるか、隣の人が飲み終わったのをみて私にもわかりました。ここでは、ラッシーを大きめの素焼きの土器にに入れてだすのですが、それは飲みおわりと地面にたたきつけて割られてしまいます。犬たちはその内側にこびりついているラッシーがお目当てだったのです。彼らは私がラッシーを飲み終えて容器を壊してくれるまで、実にお行儀よく、おとなしく待っていました。

ところで、この町で一番油断のならないのは猿です。猿はその数もさることながら、屋根や堀の上からすきあらば食物取つてやろうと、常に目を光らしているのです。その洞察力はたいしたものです。私などは二回もその被害にあいました。しかし、その猿たちにしても店先に山

のように積まれてある果物には滅多に手を出さないようです。

このようにここでは、お互いの力関係をそれぞれが納得しているようにみえます。かといって動物たちが人間にまったく従属させられてしまっているのではなく、それぞれの動物の社会が独立して共存しているようでもあります。そして、人間と同じように様々な顔つきをしている動物たちを見ていると、人間と動物といつてもあまり違いはないことをあらためて実感させられます。ただ下等な動物から高等な動物へとという段階があるのかもしれませんが、そんなことを考えると、お釈迦様の輪廻転生物語であるジャータカ物語が脳裏に浮かんだりします。あのジャータカにみられるようなことが、このヴリンダーヴァンでは実際に起こっているのかもしれない、そんなことを感じさせる町なのです。